續像
復讐

若見英雄錄

四輯

六

遠
2509
35-27

遠
統 2509
35-27

繪本復讐英雄録四編卷之六

宿仇を索て野村生人と逢ふ

新知を得て狭牛田事を語る

毎院野村新十郎種孝 旧名い男 兄童 左帯 を平安京より来よられば

三河大橋の敵なる歌左ふ宿を投て郎の宿を窺ふと去る

九月上旬ふ故将軍光源院殿義輝の臣義昭郷を補佐して

尾張二郡守護田上徳丸言長め精兵数万を率ひ

を江路さして攻上るべし依て義賢入道三好長の三光院

ふ左組をろを以て国中に十万八千の堅柴を揉へ啖止んで

と支度に落軍の勢ひ疾く三日ゲ万ふ急く攻陥され義賢

ゆくへ親なるの城を棄て水口の城ろぞ保をろ叶風聞ふ

郡三老ども霞い物を兵い沸岡冨田ゝて初軍左る張義業
紀信癰の悩ゝて費めい浸ちまでいよ〳〵力を絞ゝて河波
濺波へ進ま潜ゝしゝば義昭郷徳なく入洛あり猶ゝ大将
軍により緒田上綿ゆい弾正忠ゝ任ぞゝ是威風同光ゝゝ
ゝば三好義継及松永久秀ども降りゝき結ゝく軍令厳ふ
しゝて吏胥の貪婪士卒の侵掠絶てなく都い粛く静謐ぬ
余ば稚季い十一月の上旬ゝゝ十二月の中澣ふ及ぶまで日毎
ふ客店を出ゝく洛中和を巡ひ歩ゝ一日洛西わ
山の左側を初ゝて三條の歌店へ寄ゝふ知通の松原ゝ是
るとき向おのゝゝゝ材ちく骨逞き大法師貴ゝ一笠の
僧笠を載き才ゝい編き方袍を纏ひさも苛め〳〵き左刀打

刀を横ふ帯一の狭拝を左ふ踏げ右のゝふ一把の決弾杖を
衝ゝ〳〵ゝく酒ゝや酔ゝ歩む風状ゝゝゝゝば大路を窪
と左右ふ顧ゝ躊ゝくと漂ふ如　に踏裏〳〵酔ゝる舌を弄して
遠ふ冨江南郊水　高花天地一閑鷗　と一聯の詩句を
吟ゝつゝ遠方を望てゝ来ゝる遠斯間洛西ゝる妙心寺ゝ大
龍和尚のゝゝふ狭斗ゝて大力無双の行者あり原い時
及柔甲ゝゝや吸ゝ　左ゝ武勇のゝなゝば文雅風流をも
嘗ゝる英士なゝ　ゝゝ若ふ浮ゝ是ゝて才正ゝ知ゝ流
落ゝく絶ゝゝ是ゝい者ゝ大龍和尚の金下ゝ居ゝく洛中
洛外ゝ是ゝるも僧衣のゝふ彩刀中刀を佩て沖を闊くふ
諸人嫌ゝ且ゝふゝ斜ゝゝば附中立夷の冨家ゝ和尚師

絃を清ぜしに狭牛入来て爾らとて来る程に大龍和尚忽く怒り狭牛い什麼として逆糸ゐ布とありゐるふ狭牛自若として座具を布らく言て曰 一鞭遅到則肯綮 君駕大龍吾狭牛とゐそれで禄師も心解一座も仰よ感ぜしとや拉ぎ手の村新十郎いをゐ張客ゐまで出るの縛を初るよしゐそれば縛新みして左刀刀を帯ゐいゐゐで南部の大流和尚の悪僧とも思らまで素甲の法親王の坊家ゐと足まで人とも仰せで狭牛揚杖を携へゐゐも怪しさ樫杖見定めく勢徑の業ゐ偏い俺又足の寛家廣漠成渡ゐ軍の世を思ふ妥ゐゐいでや主新客を試てんと徐途ゐ途ゐる時候しも季冬中澣の夕月冴く如ゐ山嶽

ゐ途ゐ星松のそそも変光茂りぬまで樹くの指い表指く新い宛行網の目の白砂を置ゐふ竪雪降り聲る渡もゐゐゐふ宛凄ゐ月の光ふ程冬い向ひをして踏ゐも凍ゐで笠の内を吃と刀ゐゐ月ふむゐ[illegible]ゐまで俺面ゐて照ゐゐめ般方い宣ふ刀分ねで要ゐてあまて行遠ゐ夜那大法師のゐの痛を丁と拿いゐふ仮坊ふ内の同ん留りゐくとゐふ陸ゐく挽庵せでたちくとゐ三歩遥巡しが褄を接く躊躇り乍ち毫も動ゐで[illegible]て変振ゐで那歩刀ゐまで紛を防げ毫礼を做や洛中ふ浩まゐく名を初れゐ狭牛行者を紛ゐで言ゐ汝い暴悍を主とゐる業賊ゐん有徒で一敷毫生の功徳剃那ふ往生ゐ長ん引

導の狭筬杖を喫へよと言せも終に従ひ給ふ海内形容無
双を常〻僧の分として教を嗜める法華こそ悔〻けき
そも俺と達ろ思ふや周く天下を経歴く貴賤を懲〻
孤弱を援ふ野村新十郎種孝と呼まる西丈石南の種者
なるぞいでや如事を見せんぞと乞ふ生〻一丈有餘の
擬宝珠双ふを被て瓶花麻裡ちんどを毒ごとくに撒めけむ
巳下の丈三尺ばかり勿ち開と拆崩き協ふの像き根のつき
る生樹をば種〻ふ拿恵枝を挽傷指を拗棄掉一掉て
悪僧兼まと麈けば狭牛嗤く僧笠の紐解棄弥法ふ
宵後へ抛捨と投考つ焔て素〻を面貌賢を来〻外を肯み
給まと百日俄も剃じと見しき敵賢い双眉を掩可に伸ふく

る優婆塞の鼻梁亜眼清〻く威風弥新堂〻うゞ体の
孫杖を岑十行ろあろんを猫探柔微莖ふちまて移入を
内一内と繁〻跳走へく種孝ゞ撃生擂の捧を狭牛ろを
拂ひ人更もせぬ数刻の闘戦鈹百八流廉溜の七流孰まも浮
る術ろに力も一双劣らを優らぬ精練玉妙の絶藝剽
捷方見眼を磨る素朴握い水を捲て青地躍り弦を廻ふ
狭孫杖い雲を踏で黒竜翔る精弥互ふ厳境ふ入ろく一熊
男ふさ奮敵突戦秘術を惜まじ挑ろる有理一代ふ弦
繃なる両雄の勝負を争ふ戦ひちまじ目見〻ろる一
場の大奇観ろいみちまども狂甲疾なぐ冬の天野路ナ
徂来の絶つまじ苦ろ月ろ外ふ親場児ろ

臧ろまこ有右而あ欽怯ぎで距ぎて小夜闌まで戎百人ばかり囲へ
ども揄贏のらこも攻くもびが互ふ心よ鑿さ威じ徒牛せ河
を渡ゆをまこ壮士一宴よを停めよ心悟さ汝ぶ力ぎを武藝事
悍中く山賊茶殺の本素なるぎ必故あり分上ちくん実を
ゆく我ふ吻とくへ且俺上を沉出さんにこを静めて吻孫ろ
しと傳の樹招よ尻彼て彈杖を側ふ問さ原貧道い遠ぬ
て須田某甲と呼まこ者退程して上國へ登り時夏加たて
吻と変孫して一法候ふ仕へ功を累て千貫の采地を賜り
徒他隙狙ふ色ふあ上大戦場して寡君の指揮あり地ち
もあへ往辛を全め毛さ世こて厳儘と影りぬ遠見將
う者軍門ふ立てい君命をも用ひざる而ありとつ文ず

徒し俺ふ恩なぐ主ぶの怒よ祖し時ぶ徒者の聟よ益
君和を主ざけらまこ心なくびも日を差るに去る永禄十年
四月の比霧よ寡君の麝治あり奥州ぶの領主葦名修理
左更平紀左盛氏ぬしい武威東州よ震ひ奥羽の良將と國
ゆまび霧よ彼亂の弓矛のく風流を寛ひ森まと日を割
しての命を兼り亜ちよ那地ふ赴き陸ろさ下野國ろく
ろよ悪びぬ猿人の雑あ〜を併け土人ふ託益君命を帯
うる身ちまび一且復命のうへ再び来り什麼とも力を副べ
しと約して急ぎ立陸り寡君よ復命し後一吉日を経て
上書して途中の一條を中上武芝の本末丸推んも不便ふ
いへで下野注芝の名皆し出陽りりへと清るよを繕ハ

野村新十郎種季
鐵牛道人

寒月枯林を照し高郊外に両雄武闘い

左右の袖をくゝして牛四日といふに不さも便を賜り行路人に変くして仕ゆる主ふ為きさ志寄性の約状なり吳日の令ひるとを吃と情を居ゝと云最ふ命あり遠亦後人の毒舌よ初い茶しと思ひつも器をて社居しに約莫一歳あり を経く今年五月ふ近で漸く出仕を容されしが貧乏もまと天性暴慢殺意の氣強りのちまび終ふ志を変て簡ふ痛しる高能天地一間酷の一聯句を書院の大林なる張附紙ふ孫し猜職孫を辞して南海を退去亜ふ野ふ帰ふる人い更ちりそぐ嘉さへもなくなりまされば こい如のまと殺くを側の者よ弱きども色し活より妻主い丈妻とも亡国除約よ出し由仍れを指く案ん寄なれぞふををして都

までより来まとも浪人の分の旧主の憎ふ仕皮の途も塞ちてこれ恥ういしき事にみちまども御ロの術もなき害しさ脈ふ門ふ投て妙心寺の大龍源師の徒弟となる今い横牛とぶれども心い高きぬ勇士の如き通者を渡て結へ繕び武名を耀さんと思ふなる俺仏魂を師も嫌きてを智めふとなれい徳もカ級を縮衣の表ふ様へめる有髪を人俗姓い固弟右衛門永教即是ちと長流活を宮果ど種多い鬱毒感慨嘆ふ耐ど悶絶ちして踏躇しが孫と和め術ふを者態懇ふ礼を及ぶ系来英名耳に聚固永教ゆうてんよる徒勇武幹教婦なる辺の為氣邪唐の駱賓王が検衣着盡着修衣と吟ぶる都事をも

思ひ合せて悵しく思ふ他人の牙ふとも情強こと有る紙
剃て俺同胞の恩人の牙上吟うも堪ぬ恥ひ有る事在下方僧
野村新十郎と名乗いい寄る仇のあるを聞く皆し流け
槍の緑ち事実い新お名の名爾の産岩見童左郎物名色蓋
と今改めて種蒔と呼ぶ[illegible]ぬ寄る歳下郎ある板揚て俺見
童義及妹が窮泥と幇泥あるり[illegible]涙厚恵中くに云いて
謝しをもべくもいとべと又も嬉首謝ちるるぞ永和も赤
はどちうて四巳が童左郎色蓋ぬしてい座せしようお
登も今妹ふ吟及びぬ不相識男ちいあるまども方僧まで
互ふをと接へて関挑し涙様さま遮莫各毀傷あるり[illegible]ぞ
完可賀拉同まりしを縛多うまど遠知い長浪の席ふあ

ぞ争俺僧寮へ導さ為うせんふ歌庵へ泊りぬうどとも苦
しうべい拉く一夜富りぬ西氣貧僧ある事ども閣黎
飯殺若湯の管結い足しくもあるべと言つ、口下を揚り縁
と蓋と縛杖を左右のよに金つ流とぐりに起身せばは
種蒔も辞ちるる及ぐべい律ちて妙心寺へ到り[illegible]牛
い本流ふ入く大龍和尚ふ故旧の友ふ逢て律ひ泊てん
ぬ一夕寮ふ留めく情話を遂いさんと清ちるふ新くも
許可されぬ事ふ座りて種蒔を寮ふ延て休息せ自
泊飯を按排して賓主高〻く且喫且話ふ大剃の静境
といい更闌さまべ吟人もなく心安う有右而種季い浪
牛の同が法言兄童義が剣を病て死せ〻事妹嚮ふい雛言

と欲ひ初んゐ自ら煙花を分を投せ〜に種孝ゐ元を遂て始く文芸の譬のゐ小害せ〜を図種小復讐の志を変し姉を携へ宇都宮の由中を奔り小拳豪姉小路殿と称し後ふ孫と改む が所ゐ元て要ゐ仙毫の窮泥 二編小見へ著せる 雑松を平が義仏宇都宮の祚の昊告楯改系の明素て泥解し後副子が病死せ〜こと種孝上郷小改系の渇見の時大宮輝峯ゆ〜より嘱あり 恐元を他悪僧削拯仏が興小巳小焼殺さんとせ〜一條及び紙中立山て大怪を撃殺して山氏の患を除き より富山の客中黒川の妖怪を結ぶく勇士年角紀良恵小益し〜 以上小泥氏の録速終 三編小ゆ〜小加賀紙あを終く遠里に到る一郎始終謀を畧し要を抜て車を海潭ゐ小万古鳥つの狭牛を人武い怪悼武い憤激宛然を分ゐ関る像小義を使勇面小遂を見へ〜り結ぶく元を欲い妹を連て叫ぶ明る軽餐も終ゐ種孝い別を告ぶく出んとする永秋の狭牛殺を却へて一宴等孫ムも種仲小晒を元て足下ゐ体ひ幼御して一膳の力を副べ〜と勇むを種孝固く辞し元為体ゐる某が雙い三名小ゐ者ゐ在下が眼を元ん見を祝小精廉を変〜て〜ゐ〜小元ゐらゐ芳情い深く示ゐ〜ゐ〜ども楽仏が成仏小和尚の引導を煩いせんい名小ゐ元ゐ〜物体ゐ〜を鍬きて元へば狭牛大小打知い首ゐ〜ば奥道い遠ゐ知小ありて 酒中小と降ゐの次編那三名京畿の間小立を徳ゐい何而

みもあまた是下の客房へ竊ふ報告せんふ楽仇が骨格幸
紀面貌をさへ知つでいこれも便なしとこふ種季狀無し
よく図めへと那成淑光紀太郎廣淑持世軍たと弟門及大川國忠
八たち仇ら相貌いこくろうと告るを狭牛弟を含て懐紙ふ
弟門写徳側ふ立〜頭泥嚢の疵ふ納めく種季ふ對い足下途
後那里ふ却さめふとも歌店を貴俗ふ告報めふ多
の標徴い妙心寺中狭牛へ野村新十郎と縁さまんい勿論
の緊要うて他の耳目を無るに如ちるべし扨吉路い這より一
旦丹波より但るの男を寛ひめへ思つよ那奴仇這里四下ふ
い立ぞと見へぬ但るの國條淳い名ある金泉場うて法人
の聚地方なまづ時ふ寛泉の照路を得る縁由もあるべと

ちつむまづ種季沛く勢び義流の源切情く感佩社ぬ某
も法思ひいうまいて亜ふ那地へ赴きうん足下も縁自覚
しめへと力を拿て起まくもるを狭牛粉も俗波を巻を新
途を流して長別の情をも魅むべしと又も酒を勧め扨する
うぞ生ふ時移りく午の唄うく法及ふ種季い夫日を約て
別まうう

時人危を救ふ皆掛村の疾月
賈客雑を免る黒糸嶺の曉霜

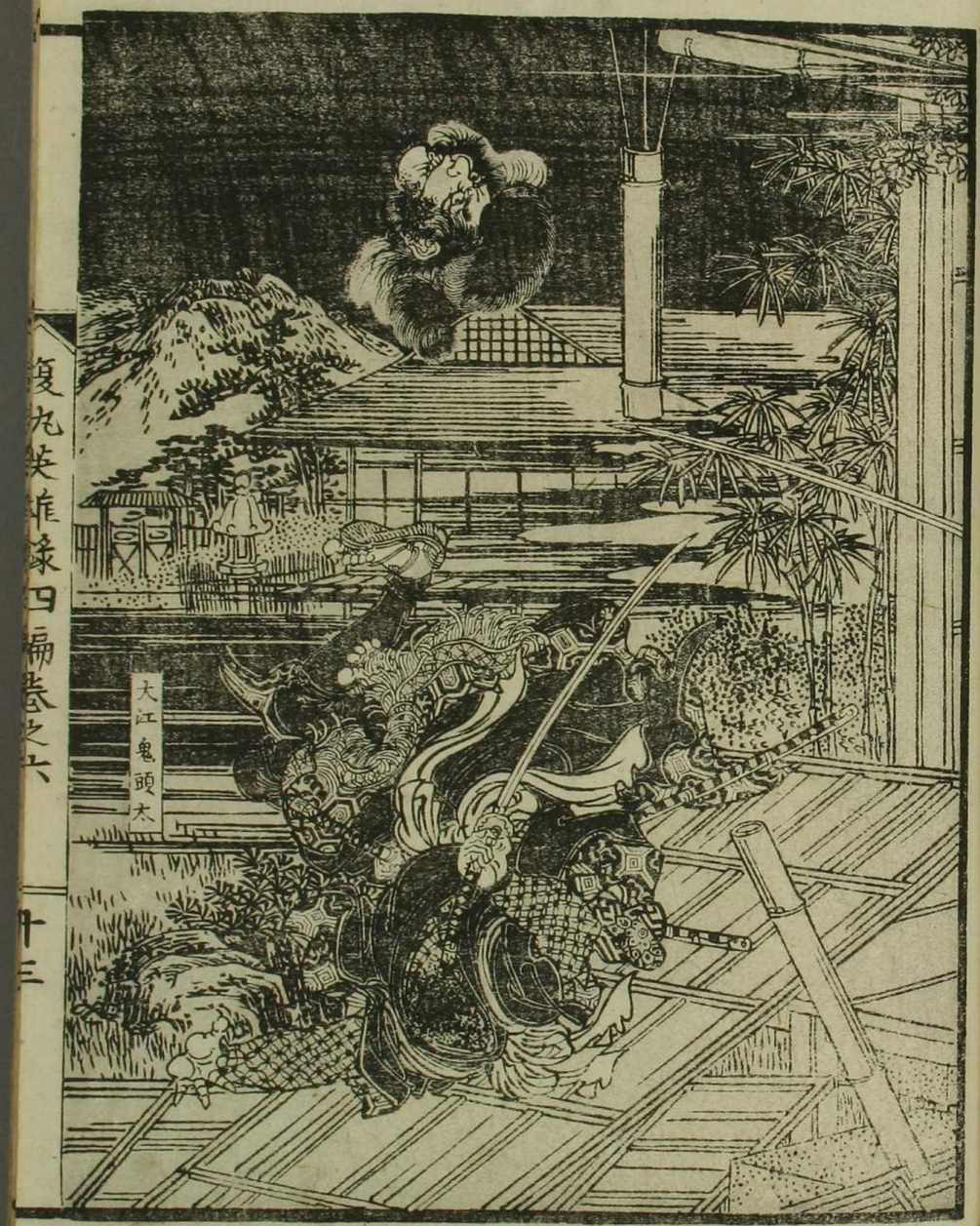
却説野村種季い妙心寺を出て三條大橋の歌店ふ向りて
金率ふ唐渡を借ひ猿の湯殿を料理て歌店を出ちう冬
の日已ふ未后ふなるものう思い起てい中くよ約意王て歳

雖く歩ふ丹波路を望て七隆を西へ出行もなく樋川より
乗り人多き良なる海の航よ打乗て船て川をそぐ海りそるけ
船の中に年紀三十ゐ位の若者の小厮ふ一擔の行李とも
とし乗るが不景種季と知つ船む中に航の那方へ若者言
種季い人より先ふ岸ふより禹歩ふ足を急ぐに件の客者
も跟ふ屠て行路る中う力称い改て武者隆行なんどもと
まふなる壹國の山方と猜しまつてせぬ遠里ロ下い鞍そく
色ひ〜ひ〜路よ行ちるや吾知行所前途の案内い雖ふ知
ふ惰まて徒急ぐふこそと言ふまで然而い孤独の山方路
次後ちさいてもそ嘯く歩みそ乗せ日暮い酷く傾
きぬその都より丹波國熊山（薬田那）へ路行ゐ里とい量ども大

江戸（山城丹波の國境大江山の禁なり今老の坂とゐふ）を越く今より行ちるで夜路を
辿んこもも淫ちさいてとちまま酒家い低ち國行来那竹田街
なる賣絹鋪ふ使ひまて縮屋の折三と呼ち者よ行り老
紀紀の婆よ諸國よ都さ家へも屬行色ひ遠里い故ち熟路
み行り遠田もを江英流尾張伊勢を巡りしゆさ京の
歌店をゐ発出つまで言首遠里の義主色りに徒時移り
い移よ今夜ハ堅東京の駅（山城國菊野駅）をとちく当掛村（別名）
お識許　行まゐ発く那里ふ投宿りて法旦ふ丹波へ越
んとふひちるまま若〜うちゐい酒家ゐ歌店へ導仕らんふ
年くと若よ徒憑ちる赤心面ふ霧ちるまゐ種季もちちく如
く立下ハ野村新十郎と称ま一知不住の浪浪人遠田天

揚豆を一洗し城崎の温泉よりも浴んせんと発足しが丹後と
但馬と何れの方へ先行んと但よりまづ其向を楚と定難
ぬ足下は但馬の人なりと聞バ城崎ハ云も更なり丹波丹
後も隣国なれバ其地理風俗地方の案内ハ詳に知り玉
ふめ粁宿泊を聞せて未なバ足下が旅行の用意の便聴
冝しく好意あらば聞せ玉はれと在もなく四表八表の譚
して行ほどに黄昏時候にて新郷 丹波国の西郊なり 背掛の村に趣
り那縮屋が主が扣織許に宿りぬ寒村にハ似げなく好見えし
まで其広らに造徹て調度も清楚く主人ハ妻に
に遠れ之ぬし登くもひらのぶるまで主も寒暄
をのべ終り扨是なる刀禰ハ野村新十郎主とて武者修行

の此方なるを路次家戒の鞘の些を誘ひまつてせぬと微笑つ
町人の伴当に應くるる武家の刀禰を那若黨に呉る
酒肴が成機と一事ハ什麼やら随分盛饌ありて歎待む
ずまとなに丈妻ハいうぞう呑ん且痰温湯をよりせよと媒
庭に着しめなり互の口誼ハ要なければ略して遠に写さぬ
僕を促して糧菜及び主僕に御を浴のせ野村とよ
肴皮冝しく亮れ案し称し閑話不説糧菜ハ那縮屋の
甲幹主僕と一室に引まへ入なる小奥の一二室も先宿まる人
あると見へて咲の声又ハ婢が提げ来る燭の明遠子の人
影の些かなり座席を囲むが如に移りて数さん知つまる懸
而各湯浴も終まで待えく晩飯の膳を備めぬ中酒の助


大江鬼頭太

醤樹邨乃
客舎ホ
野村新十郎
夜襲の
偷児を斫る
野村之新十

飲も折三ゞ心と砌くや解ゝ海味こそ多くられ山珍の珍
と列よゝしゝび種まい且愧且謝して只得盃を巡らものゝ数
献と累ゞぞ請て収めぬ折くゝ外蓐を設させ縮屋の小廝へ
次房ふ疾く外させ打こゝい洒豪い力称の山落を結んけ
宮くせめくと野村と共ふ一室ふ入て一撞の初書及祇裏鼻
紙嚢ちんど枕辺途く按排べ法とゆふ外つく洗うて見ぐも
一瞞の美をぞ結べるるもも遠里い王孫を距てと恋ふゝ共
名ふゝあふ大江山ゝ遠さる山根の里ちまび粧ふ二戦を
ぐれども寂莫とゆの凄く疾い山さへ新便く流ゝ水と松
籟の音のこゝるゝ際こゝてあゝ遠泉の門の外面より急
迫欲けび店訪ゝ外居る隷僕易助とゆるゞ寝坊べえ者

うて誰へうるぞと誰何まい莊安訴より来まうと歩も敢
ぞ易助い什麼の要うい初ゞねども遠意疾ふ打角寝坊
ゝ外蓐をび裸で脱てもゝ中ゝるゝ明日の飯餐来まうびや
同くうゝび陽炎孫ゝ去げゝと噛く者の外面ふ泄てや怒
まる者掉まゝう公より緊要の用徇永ゝるぞ途曽郊途ゝ
四下を時ゝ逗絨の徘徊せるを捕せんと得捕安人の莊
安訴へ来うめい猿客を查弦あふゝる疾雨うゝび主い勿
論汝ゝゝと苛ゝゝ目ゝんと罵まび易助い怒ゝゝ周章記より解
拵ゝる帯と結ゞ褌ゝ衣を揚りてうち被ぐふ裏を表に云
ゝ雑掉札ゝ袖ふ双ゝの拵ゝ穿らび和面い頻ふ焦燥
て弩ゝ周けと指ゞふ易助い連袂ふ意なゞゝ左ゝ右ゝ

褌を帯に締びく庭ふひり門の戸開けば雲衝ごとき大漢ふ各長き獨刀を揮へ只人まぐるぞ罩入くる面魂の凄しげるるふ樓うち絞せ〜易助い卒四吏人さ四四るとちゃ首を苟うるぞ微笑ちぐ〜前ふ立る丈名の賊俺くい山嶽なり賣絹郎の憩居る一室へ案内せとうふ易助好言つゝ畏りいと那里を望て俸ひ彩を主人い便室より見を引て大ふ驚きさ易助俳い嘉客の汲引して那処へ行ぞと智祇らきて猶可ふ怪る点点良ふ強人さうゝ色さゞと手首ゆあり要ん褌を揮舞し勢ひ悍く不管三七二十一ふ撃拂ん と狂ゞ像り 跳躍まゞ二名の賊い大ふ驚り嘗きさう一文時郎め出迎ゆきとおある一人野刀須臾離と抽拔せい咄嗟

と可牙を蹴して逃んとするる背後より頭脳を抓地と斫彼ゞ若と一撃易助ゞ卒泥卧ふる手打表彼ふ倣し素布褌裡流く血汐ふ脊縫を染て那巡礼行者の爰拐被し像なる点後の体こそ嫌ろま主人き妻い遠客ゆふ心魂も牙ふ副ゞ食を換て弦を義を雑子ろ孫ゞ弟を潜ゞ二賊い巳ゆ目を眼を配り客唐さ〜て寵ひゆ〜不訳野村訓十郎い爾ゆ門郎ゆ参ろ毋ろに緝捕人の猿客を査張ん喪ふ来まりと呼ろを風く仄関〜俄ゆ俳〜編屋折三と呼碓て由を告げ威儀を孔さゞ皮吏ふ見面べ〜と端ろもに央巷ふ結来〜て留ところふふ宴時みて戸ゞ開く音〜ろるゞ程もなく主人と家僕ゞ参ろて盥賊ろくふ間もなく列

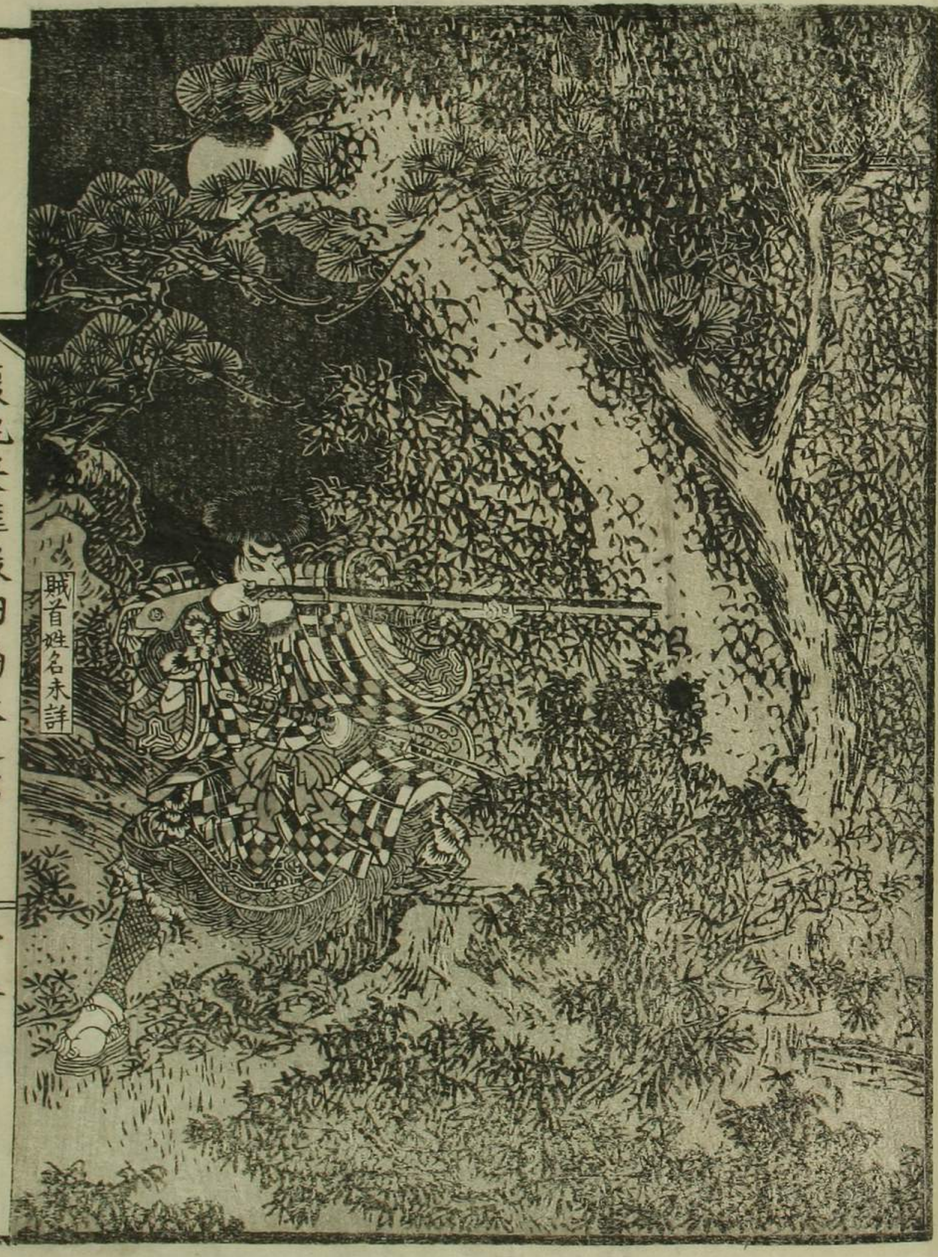
しき割ふこの那方にて関心し是下みの死自遠里ふ居ゆへ
と面刀を帯る間亜しと起處へ二賊い已ふ席蔦を轢ら居是
音と高く亮陶を繁と推拔けば裡面ふ白面秀眉の一分の
壮士端然として中をを造化恵を某賊們俺投宿居る一室へ
臆踏入可惜二を者已が東西を失ふや一歩ちりとも為むも能
効退とも往生覚悟せよと言せも敢ず胴腰を抱り黙を居る
人衆二界より眞ふ高く寛ふる俺們が大奇貴ふ那邪帝
奴が和所を餌ふ居ゆ身の護ふちるも知ての疾驚なりさ
びる俳が赤鰮ふ賽る風味の遠を刀魚を喫ふく拉拉足ね
うと拔刀を刃の光ふ眼を狙ら是〜責術帝い咄嗟と奇
無んと起ど全身い作猪座の戦く双腿折三い托地と仆く

震ふ遠方い撞を鐘が毫とも撓ど撃入賊ぶ刃を潜り衝と
入て刀拔ふと第際拔て高く撥抗大の漢ふと鞠合撞く
投者ふ簷廊の面戸二投の三合ふ音く可に撃[illegible]却含
ふ面戸撲地〜と面三投一斉ふ拔き件の賊い座面へ反作
てこそ仰まう斗事を雑刃性刃克膳續て蒐る一個の賊
出来ふ青年児いで中大江鬼紀ちう鬼一口ふ服して奏
ん金俳せふと血刀を都ふ驚〜跳来を東西ともせぐる彩
十帝拔ふ疲ふ刃の電光丁く托地と教猪ぶ万丈不南の
郷村ふ陰嬉ふ山嶽ちんどがいうで欲せん発彼性と剣を彼
うぞ投蜚さ[illegible]一賊起身て幇助来つ割と合せて競撃と
左右ふ面り勇士の剽捷踪なりる剛戦の一室の渦ち

折三い懦く髻を振ぢり次廁ふ震しふ廁をび雑ぼく
音せぬい瞞滾しふ探しゃ已ふ紙所て配る中とたう丸ち
ま寢くい男くども詮術もちくさ統の宝の渦の亮紙をとと
抜き実法とて跳入又見ぬ個の賊あり猛可に絢商の一
擔行李と紙裏を掻攫ろんとするを打三い遠情ちやと
跳びつ跳ろうくも考しと繰るを抵地と蹴作し奔り出
ざれば貨を獲せしようい長居悪しと通ると踏く猪
出らを遑遽怒し鬼弦を出い器廊より寝ぬ男を躍
らして跳ふる那時晩しは時蹴し内一内と拂ふ刃ろ
新ふ尻と吾ふ首い寝く滾び墮ち剣へ渦抜ける器端の

貫周囲尺作の大竹を半ようち去一文字に裁ぢせう遠漆
ふ三名の賊いふ面投て走ぬを種季い賣絢昇が行李
を復さんと尾走く門名へ出て出什磨学賊を約季を商う
ぢび鏖ふせんと喚りく疾風の像ふ廷蒐まび通き果と
三個賊撮ひ東西を打拵措ちく色しつ種季を中ち
金竜撃んとちる打義用の明うちんだ四口の刃晃さ
徹り一注一来相磨を鋒抜の音响い切くとして出さ嘯
ぬ冬の疾の那里の茂林の木法を沿ひ跟ひ途く大漢ふ
赤遠賊の須紙ふと歩び しくて打拾特ふ苛めこぐ火縄
ろる一口の狭地を緊邪ふあて野村を撃んと部へども
伏敵三名の小賊と闘ひ烈しきを正の人紅あへて宮ぢ

山村乃月下ニ
畸人
晴に
種季ガ厄を拯ふ
山人姓名未詳
野村新十郎
小ぬさひと
小賊
小ぬさひと


賊首姓名未詳

己失してい悔ちと一妾牧稼ぞどてあまこ三個賊も各
程疲を居多彼所ゑらまて足ゆうこそ負紙遠方へさし
向く漕寇を宮めゐる嗤危ゐ程季ゞ今遠時の金銀い因
のおなる烟ふ名しうゐる一朔の窮泥鬼ん宮いあじどぞ
見る清の竹林湯まふ行徨一人の檜柳更あり皂縮弱作
又面を掩ひ役を搜りて東西拿出し樹陰の賊の面とまて
殿と擲つ礫い月ふ晃こて孫と欺く一個壷の寇懲ぞ眉間
ふ中りて摧止と摩け逃る水ゑ眼を射きこん驚く怪ゑ縊ば
ふく高れも火蓋を截び嗤と嗚し狭地の紅丸い耶書
ふ新十郎と歯ひ居る一賊ゞ脊梁より助うけく撃徹
まぞ苦と一撃叫もあへぞ外きこう是ふ驚き二名の賊い紅

の涯と逃ゑゞ樹陰の賊も樹間を潜り眼を晦ま逃失ぬ
種乗い編屋ゞ行李をこへ収獲ちび高ふ長んも要ゐこと
宜時候ふ長拵しゞ角ゑ戦いなゞ遠方皇叢中より一白
珠の樹陰を指こ内ち飛を眼吱く足ふ忽ち那里より打
出せ狭地ふ小賊の奴ぞ教さ長ぞ徒浮樹陰ふ俺を寇
ふ賊あり長と竹林中ゑも人みて俺を救ひ他を妨げ赤とん
寇換ちこん嗤治ちこと独居つ賊ゞ生措ち編
屋ゞ行李を生涙ちく収獲ち那方に向い竹叢中ふ人やは
座ちる野村新十郎即今活命の恩を謝ちいとん出させ玉
へと表三婦ども面紙と〜て意ちゑれで只得歌后へ鳴り
て主人夫婦編屋打二主僕ども嗤へて賊を長ちらせ

一條を譚り今の志を安慰めんと言つて紙書を遞与うそ
大氣始て蘇り〳〵心地して歓び大方ちうざり紙筆如
さもて仆屋の中より立下を救ひ〳〵人い推ちうん遠里ふ
富まる客人多の中ふい紙ぞやとちよ立いこの者什麼縫
の物屢よ忘也伝る他の客人多の安否をも詔絲まいらせと媒一二名
を書ふ立ゆりて又六名の商人所い来なく一部よ集
めひめるゞ夫の一室に居ぬひし〳〵唐人の醫師さ為い生行
李と共ふ丸人ありぞ林の上ふ儀賃と遠写緑とを書し
めへめと指出せば立人い提所を書を食て拔図て遠什
麼と舌を吐さよ蹟い適美ちまども酒家い一切債雖し
打こめ〳〵債て呼せめひねり。否俺们も同じく帰さ賞
金い鑒視もせめ四角文字い為い承債潰ん云い野村の大爺ふ
このませめへとちぶうえ人い否方正文字ふい非ぞ問ふ
伸つ屈つせ〳〵客ちまど債めい地図理ちうと野村よ財
緑遠写緑を債めうべ〳〵とわうんを種雲ふ拿て見
を後ふ字体崩〳〵駱駝の如く乱草ふちう

○捷水櫛原皆掛村　京塚茶酒桃不安
和途茶里山河遠　須戒草行く路雛

○射池鷄亀千金弩　自使傍視肝膽寒
一片婆心御忠告　休笑唐人陳奮翰

と二首の詩を録〳〵ると云ふ債ト〳〵思ひぞ猿を拍唱
〳〵完尓と笑て徒得縛判紙〳〵と言ひどふ主人支妻折三

主僕輩們も傍ふ笑ひ有理唐人の淫奮輸洒氣們を
ゆふ冰解ゆるぶ帝来大人も唐人まて地さすちをいうで俺
們が耳ふ判然中解秋竹しゆくうと繻を前めて請ケ
る遠四氣長説話ようてや指教の恨を竭をとも粧
那見次ゑ掲示しる賈客鬼雛黑系山曉霞の徒話ケ
説到らぞそそい回を更て次の巻ふ説ん

繪本復讐英雄録四編巻之六終